障害児保育の意義と諸問題

尾　関　夢　子

（ここに記しますものは，向日市社会福祉課の依頼により，昭和49年10月19日，向日市役所にて講演したものに，若干修正を加えたものです）

私は，平安女学院のどんぐり教室という所で，発達に遅れのある子ども達や，自閉症傾向の子どもたちの保育にあたっております。

そこで，まず最初に，どんぐり教室の紹介を簡単にさせて頂きたいと思います。

ここでは，小学校入学以前の年令で，発達に遅れのある子ども達，12名前後を一グループとして，4人の職員で，心理と保育の両面から，いわゆる治療保育にあたっております。

発達に遅れがあれば受入れることにしておりますので，重複障害の人もいまして，例えば，手足が不自由だったり，耳が聞えにくい，あるいは，情緒の障害を合せ持っていたりする子どもも来ています。

原因もいろいろですので，モンゴリズムや脳性マヒの子どもたちもいます。

12名の子どもを4人でみているというと，いわゆる普通児の保育園，幼稚園を連想される方からは，「多いですね」と言われることがありますが，障害児を持たれた方ならおわかり頂けるとおり，言葉の通じない，理解できない子ども達が多いですので，これでも手一杯というところです。

保育は，月，水，金の週三回，午前9時半から12時過ぎまでで，送り迎えに父兄がついてみえて，保育中は離れてもらうという形態です。

どんぐり教室が，始めて経験する集団である子どもは，お母さんと離れがたくて泣きわめくこともしばしばですが，どんな時も，お母さんと離れてもらっています。そうするうちに，すっかり泣かなくなって楽しそうに行動したり過すことができるようになります。

治療保育の内容は，遊びを中心に――本当に子どもの遊びは，大人の遊びと違って，成長にとって欠くことのできない土台ですね，いろんな認識，言葉の獲得は，遊びの中で，気持の高まりと共に，より複雑な働きかけにも呼応できるようになる中で子ども自身がなんとか表現したくなって思わず言葉になる，そうした経験を積み重ねている面もあるように思えます――その他，生活習慣の獲得，おしっこに一人で行けるように，お弁当が，座っていろんな物が食べられるように，自分の物は自分で片付けるように指導もしています。

こうして，日常，子ども達と接していますと，いろんな問題にぶつかって，教えられること，悩むこと，大きな声で言いたくなること等，いっぱい出てきます。

今日は，こうしてお話させて頂く機会を頂きまして，大変有難く思っております次第です。障害児保育は，全般的にいってもまだまだ試行錯誤の段階ですし，今日私なりの立場から話させて頂きますが，ぜひ，皆さんの方からもいろんなご意見を聞せて頂きたいと思っています。

ところで，大きな声で言いたくなることの一つに，やはり，普通といわれる子ども達の集団に入りたいということがあります。今日は，この事に焦って少しお話させて頂きたいと思います。

私達のどんぐり教室でも，小さいながら集団なわけで，それなりに集団を軸とした子ども達の発達はあります。

例えば，汽車ごっこ。子どもは，障害があってもなくっても，乗り物が好きですね。一人二人，フロアカーに乗って先生が引っぱりますと，又，一人乗り込んで来ます。そこで先生がピアノを弾いて「汽車」の歌を歌い，信号や，箱積木のトンネル，鉄橋を作って走ります。汽車ごっこらしい雰囲気になりました。すると，自閉的でいつもは友達の様子には関心なさそうな様子をしている子どもも，汽車ごっこの方へ視線を合せているのです。そこで，先生が誘って仲間入りできるようになりました。何度かするうち，一人でサッとお友達のいる車に乗り込んで来れるようになるのです。そうして気持の高まりと共に，今迄言葉の無かった子どもが，思わず「オーライ」と言い出したりするのです。

このように，集団の中で，友達と一緒に遊べる，言

葉が出るようになるといった事が見られます。

けれども，こうした集団づくりがいつもいつも出来るわけではありません。むしろ少ないぐらいです。なぜかと言うと，発達に遅れのある子ども，自閉的な子ども達は，一人遊びがほとんどで，勢い，集団にいるといっても互いに影響しあう，そうした刺激の少ない環境におかれることになります。これは，障害児ばかりの集団施設での共通点なのです。

こうした問題から，私共の所では，小学校に入る前に，できるだけ普通児の集団，つまり，幼稚園，保育所の経験をしようと，数年前からそうした実践を進めて参りました。

そうして，アフタケアとして保育所，幼稚園での子どもの様子を参観させて頂き，その度に，子どもが成長している。例えば，言葉がふえてくる，集団性が身につくといったことがみられまして，やはり，入って良かったという実感を強めて参りました。

昨年，私共で行っています研究会，市内の同じような精神薄弱児の母子通園施設（注：どんぐり教室は，実践研究機関であり，通園施設ではないが，子供達にとってはよく似た内容を取っているため，ここではこのような表現をとった）が集っての研究会なのですが，そこで，母子通園施設を出て入園している保育所，幼稚園にお願いして，先生方にアンケートを取らせて頂きました。

私共，障害児の保育をしている者から見てプラスになっていると思うけれども，果して，保育所，幼稚園の先生から見られてどうなんだろうか。そうした点を知りたかったのです。

今回のアンケートの対象は19園で，数は少ないのですが，そのうち17園が，「受入れて良かった」「今後も受入れていこう」という回答を下さいました。ほとんどの園がこのように答えて下さったことは，うれしい驚きでもありました。

「受入れて良かった」と答えられた内容をここで紹介させてもらいますと，まず，「障害児が成長した」というのが14園あります。17園中14園というのは，数は少ないですが，まあ82％にあたります。これは，私達が日頃から思っていたように，園の先生方も見て下さっていた事を裏づけていると思うのです。

次に，意外に多かったのが，「普通児が障害児を仲間として受入れ，助け合い，いたわり合う気持が生まれたので良かった」と書かれたのが13ケ園――自由記述で13ケ園もあったことです。

そこで，障害児と普通児との関係について，少し突込んでお聞きして見ますと，次のように言われる園がかなりありました。

「障害児を受入れる事には，経験もなく，はじめは不安な気持でした。不安な事の一つには，普通の子どもが，障害のある子どもにどんな風に接するのか，いじめて，かえって障害児にマイナスになることはないかと言ったこともありました。ところが，ところがです，入れてみると，大人が心配するよりも，子どもは子ども同志なんですね，そりゃ，始めは，皆がしてはいけない規則を，○○ちゃんだけ（障害児のことです）が，なんでしてもいいの？と聞かれたり，保育中，アーアと奇声を上げて部屋を走り廻るので，子供達が一斉に後をふり返りまして，保育になりませんでした。

でも，「○○ちゃんは，赤ちゃんの時，病気になって，皆と同じようにはできないけれど，一生けんめい頑張っている時なんか，応援してあげてね」など話しているうちに，子どもは子ども同志で，○○ちゃんに許せる事と許せないことを，自然に決めるようです。例えば，部屋で奇声を上げても振り返って気にすることがなくなりました。でも，今，自分が製作している絵を踏んで行ったり，使っている道具箱を取られると本気でおこるんです。

僕らが面倒みんならんという気持で，スケジュールの変わり目には，手をひいて呼びに行ったり，手をつないで行進したり，日頃，意志悪しがちな子どもが，むしろ障害児にやさしくしている面があって，その子の新しい面を発見したりします。こうした子ども達に接していると，保育とは何かということを改めて考える機会になりました。」と，このようにおっしゃって下さっています。

この事は，とても重要な事を含んでいるのではないでしょうか。

私達大人が受けてきた教育は，障害のある人と身近に接する機会が，おおむね少なかったのではないでしょうか。そのため，障害児のことは知らず知らずのうちに，自分とは関係のない存在となっていて，実際に自分の生活圏に入ってくるとなると，惑い，異和感が生じてしまう，そのレベルで子ども同志の事も把えてしまうと言えないでしょうか。ところが，子どもは白紙の状態ですから，大人の不安をよそに，人間らしい関係を作ってくれる，人間の多様性を身を持って感じ，その処し方を発見しているのです。

“人間とはどういうものか”ということは，概念の形成されてゆく幼児期に，身をもって知らせてゆくべきだと言われます。

ここに述べました事は，障害児が存在することによって，子どもが広い人間観を形成していっていることを示しているのではないでしょうか。このように障害児が存在する事によって，障害のある子の成長はもとより，他の子どもも成長する。そうした“共に育つ関係”を育てていきたいと思っています。

“共に育つ”という事について，今少し，具体的に平安幼稚園の実践からお話したいと思います。

どんぐり教室を卒業して，平安幼稚園へ入ったA子ちゃんは，お友達の頬や髪をギュとつかむ方法で，友達とのかかわりを求めていました。そして入園後間もなく，B子ちゃんという2才下の女の子を見かけると，いつも追っかけていって頬をギュとつかんだりしました。B子ちゃんは，A子ちゃんを見るだけで泣き出し，園にくるのをいやがりはじめました。園の先生達はこの事を話し合い，消極的な方法を取るか，積極的な方法をとるか，つまり，二人をできるだけ近づけないようにするか，それとも二人を近づけて友達関係を作るかというものです。結局，同じ園での生活を送るのに避け切れるものではなく，後者を取ろうということになりました。そんな話合いの後，A子ちゃんがB子ちゃんを追っかけているのを見て，A子ちゃんと，B子ちゃんの両方の先生が二人を会わせ，「A子ちゃんはB子ちゃんを好きていうてはるのよ」と話しますと，A子ちゃんはとてもうれしそう。「B子ちゃんもA子ちゃんが好き？」と聞かれると，B子ちゃんもウンとうなづきました。「それじゃ，握手しようね」という先生の誘いで，握手することができました。あまりにスムーズに行ったので，つい二人がそのまま向い合った状態になっていますと，再びA子ちゃんがB子ちゃんを把んで，B子ちゃんが泣き出してしまいました。でも，この働きかけをきっかけとして，又，A子ちゃんの関心が園生活の中味に向ったことと関連して，B子ちゃんの不安感も解けていったのです。

このちょっとした事件は，勿論，A子ちゃんのお友達を求める方法が適切でないという面がありますが，一方，B子ちゃんの方へも目を向ける必要があると思います。B子ちゃんは，お母さんが病弱で，少し過保護のところがあり，B子ちゃんはA子ちゃんに対してだけでなく，他の友達にも好き嫌いが激しく不安定なところがあるのです。

こうしてみると，この事件は，A子ちゃん，B子ちゃんのそれぞれの発達上の課題がぶつかり合って生じたといえるのではないでしょうか。

発達の課題がぶつかり合い，その中から子ども達は成長してゆく。それは普通といわれる子ども達同志の中でだけでなく，障害を持つ子どもとそうでない子どもとの間でも，同じように言えることではないでしょうか。

時おり，入園の申し込みに行きますと，「障害児がいると，他の父兄から文句が出ますし……」といって断られることがあります。どんな文句かといいますと，「障害児がいるとたたかれたり，噛まれたりして危険だ」とか，「先生が障害児にかかって自分の子どもを見てもらえない」とか，「もっと，いろんな事を教えてほしいのに足を引っぱられる」とかいうのです。

確かに，たたいたり，噛んだりする子どももいるでしょう。でも，どうして，たたいたり噛んだりするのでしょう。

ちょうど，保育園で歩きはじめの頃，子どもが噛む例がいくつかあると思います。私が以前，保育園で実習しておりました時，「保育園には噛む子がいるから行かせたくない」と言った親がありました。

どんな時に噛んでいるのかと見ていると，自分はスベリ台に登りたいのに，たくさんの友達がスベリ台に集っていて，どうしても登れない。そこで，前にいる友達を噛んでみる。とか，又，絵本を見ている友達の気を引きたくて，背中の服を噛んで笑っているとかしています。

そういう様子を見ていますと，自己の要求がはっきり高まってきているのに，それを現わす言葉がない。だから行動で示そうということになって噛んでいる。こうして見ていると，「噛む」というより「噛める」こと自体が一つの発達の姿であると言える。

これと同じ事が，障害児の場合にも言えるわけです。つまり，言葉の少ない子どもが，方法は適切でないけれど，自分のできる方法でなんとかコミュニケーションを持とうとしているんですね。勿論，相手に不快感を与えるこうした行為は，より適切な方法を身につけるよう導かれてゆくわけですけれど。

「先生が自分の子どもを見てもらえない」という苦情は，いわゆる普通児の保育体制のまま，障害のある子どもを入れている現状によるところが大きいわけですが，その問題点は，後に触れることにして，「噛まれる」とか，「足を引っぱれる」とかいった苦情には，子どもの発達を，狭い視野からしか見られていない点も作用していると思います。

親からの意見には，一般的に見て，もっともなものもあり，共に考えてゆかねばならないものもありますが，親がいうからといってすべて正しいわけではない

のは言うまでもないでしょう。子どもの発達を狭く把えがちな親に，先に述べましたような発達の中味のとらえ方や，障害児の存在が他の子どもにもプラスになることを教っていってほしいと思うのです。

ところで先程，私は障害のある子どもも集団に入りたいと言いました。よく，私達障害児保育に携わる者は，こういう表現をします。これを言わないとなかなか納得してもらえない。では，いわゆる普通の子どもが保育所に入る時，いちいち「集団に入ることが子どもの成長に必要だから」と説明するでしょうか。たいていの場合，「先生，今度幼稚園，保育所に入りたいのですが」で通じると思います。普通児の場合，集団に入ることの大切さは言わなくても互いに了解している大前提なのです。

少し改まった言い方をすると，人間は社会的に存在することによって，諸々の刺激を受ける中で，人間らしい，いろいろの機能，言葉とか社会性とかを獲得できるといわれています。これはよく，狼に育てられた少女が，狼のようにしかほえず，食事も四つばいで，手を使わなかった実例が出されますが——

ところが，一旦障害があるとなると，この人間として当然の前提が当然でなくなってしまうのです。なんという不思議でしょう。なぜでしょうか。

それは，一つには障害児に対する見方の問題が働いているのではないかと思うのです。そこで，次に，この点に若干ふれてみたいと思います。

確かに，自閉症とか，モンゴリズムとか精神薄弱とか，いろんな障害をもつ子ども達は，普通の子どもとの違いが目立つところがあります。しかし，ともすれば，その違いばかりに目が奪われて，そうした子どもは普通と違う。だから違う教育でいいのでないかといった連想を生んではいないでしょうか。

私達は思います。障害があっても同じ人の子であり，同じ人間としての発達の道を遅いけれど進んでいるのです。

例えば，自閉症というと，固執傾向があるとか言葉を言ってもオウム返しが多いとか言われます。しかし，それらのことも普通の子どもの場合にも，毎日よごれていても同じタオルケットとかぬいぐるみをいつも持ちたがるとか，言葉の覚えはじめの時，大人のいうとおり言っているとか，それと，本質的には同じではないかと思うのです。ただ，普通の場合は，親も「きたない物を持って」とか，「同じ言葉ばかりまねして」とか，とやかく言っているうちに，その時期を越えてゆくわけですが，こうした子どもの場合，どういうわけか，その発達の節を越えられないで，生活年令がふえていっても，いつもそこで同じ行動をとってしまう。だから，それが常同行動として，自閉症児の特徴として大人の目に写ってしまうのではないでしょうか。ただ目につく行動を拾い集めて並べたてれば，異常な存在としてしか思えなくなってくるんじゃないでしょうか。その結果，人間としての基本的に保障されるべき社会的に存在することが，忘れ去られてしまうのではないでしょうか。

実習にみえた保母さんが，「障害児の保育て，むつかしいとばっかり思っていたけれど，1，2才児の保育と共通しているところがあるわ」と言われることがあります。これは，こうした子どもたちが，1，2才台の発達でひっかかることが多いことをみてみる時，当っているところがあると思います。勿論，生活年令のことも同時に考慮されねばなりませんけれど。

これまで，障害児の見方，障害児を含む教育の意義について触れてきたわけですが，では，こうした見方，意識の問題だけで障害児を含む保育は進められるのでしょうか。

勿論，保育体制を無視して考えられないといっても言い過ぎではないでしょう。

障害の程度，状態にもよりますが，ほとんど多くの場合，一度声をかけただけではわからないけれど，二度三度声をかけると行動できたり目の届かないところへ行ったりすることもあり，一人の先生だけでは無理があり，フリーの先生なり複数担任なり，障害児に必要な時にはいつでもかかれる先生の存在が望まれます。

園に人手がないために，やむをえず母親が保育時間中もついていることがあります。しかしこれは本当にやむを得ない形態で，障害児にとっても，普通児にとっても，先生にとっても，母親にとっても，決して望ましい形態ではありません。

なぜなら，子どもはやはり母親がいますとその方をたより，先生や他の友達との関係がつきにくくなります。先生や友達の方も，お母さんがいるからと，声をかける回数も少なくなり，子どもは園生活になじみにくくなって，保育所集団の中で生活しているというより，保育所の中に異質な母子がいる型になってしまい，障害児にとっては，子ども集団にいるというよりは，背景の違う家庭の延長にいるにすぎないことになる場合がよくあります。

では，先生がついて，その人にまかせてしまう型で解決するのでしょうか。勿論そうではなくて，園全体で受入れたという先生方の意識が大切だと思うのです。

平安女学院幼稚園でも，自閉傾向といわれる子どもが3人入っております。自閉傾向の子どもによくみられるように，はじめはなかなか自分のクラスに入れず，園外へ出たり，他のクラスへ行ったりしました。他のクラスに来た時は，そのクラスの先生が，「今来ているよ」と，その子どもの担任の先生に声をかけることにし，お弁当や帰りの時には，少々いやがっていても部屋へ入れるようにしました。こうした園全体の受入れの中で，その子ども達なりに生き生きと成長し，親も背味の狭い思いをせず，他の親と話せるといわれる奮囲気が作られています。

最後に，障害児を持つ母親のことについて触れたいと思います。

障害を持つ子どもの母親は，障害にもよるとは言え，例えば，今，子どもがどこで何をしているか，台所で菜っぱを洗いながら何度も部屋をのぞくといいます。同じお母さんが夜は夜で，夜中2時3時急に子どもが起きてくる日が多い，親もその都度目を覚ますといいます。そして朝，近くの幼稚園，保育所，小学校へ入れないので，近所の人より早く起きて子どもを連れて遠くの幼稚園，保育所まで通わねばなりません。大切なお客があっても，子どもを視線で追いながらでは，落着いて話もできません。お母さんは，子どもにすべての時間と労力と精神を費している現状です。

母親には，子どもを育てたいという母性本能もあるでしょうし，子どもを養育する義務もあるでしょう。でも一人の女性として，人間として，自分の時間も持っていいのではないでしょうか。「本能」と「義務」の中に，一人の人間としての権利は押しつぶされてしまっているのではないでしょうか。

「私達には，憲法に保障されている『健康で文化的な生活を営む権利』なんて，程遠いのです」といわれた，自閉症児のお母さんの言葉を，私は忘れることができません。

憲法が暮しの中に生きているような生活を，障害児にも，障害児の親にも保障されるように，少しづつでも努力していかなければと思います。